

[信仰と絵画展によせて]

## マニ教絵画をめぐる

「マニ教絵画」一耳慣れない言葉だと思ひます。マニ教は世界史の授業で少し触れられる語句ですが、その世界観を表した絵画が日本に存在しているのです。「六道図」、「宇宙図」、「聖者伝図」、「天界図」、「虚空蔵菩薩像」と呼ばれる七点の作例です。描かれた当初の図様がほぼ完存するマニ教絵画は、この七点しか残されていません。世界的にも極めて珍しい重要な遺例です。

マニ教はその名の通り、三世紀頃の西アジアで活躍したマニ(216～277)が開いた宗教です。彼は豊かな想像力を駆使し、ユダヤ・キリスト教、グノーシス主義、ゾロアスター教の内容を盛り込みながら、独自の思想世界を練り上げ、それを伝える文字としてマニ文字を考案するなど、思想家・宗教家として優れた人物であったことが分かります。

弟子たちによって教線は拡大し、四世紀には地中海沿岸にまで広がっていたと推定されます。同じ頃シルクロードの民といわれるソグド人商人たちによって華北へも進出したようです。こうした急速な信者の獲得は、マニ教教義の特色に依ります。すなわち、折衷的な宗教である点です。キリスト教・ゾロアスター教・仏教にいわば寄生する形で広まったといえます。従って現在、マニ教は完全に消滅しています。ただ、イスラム教の断食に見られるように、その名残をとどめる儀礼や習慣が認められると指摘されています。

では、日本に現存するマニ教絵画について見ていきます。まず、当館が所蔵する「六道図」(以下、文華館本)です。その名の通りもとは仏教絵画であると見なされてきました。画面の内容ですが、マニ教に

おける個人の終末論が表されています。すなわち、最上段の「天国」、中段の「人間界」、下段に表現された「地獄」の三世界です。生前の善業に応じて何れかの世界に行くと考えられていました。その行く先を判断するのが「平等王」であり、画面下部に描かれます。同じ場面の左上部に表されているのが、生前の善業を視覚化した処女神「ダエーナ」です。画面最上段の天国にも描かれます。

また、画面上から二段目にはマニとマニ教僧侶及び信者が表されます。中央に坐すマニは独特の白い衣をまとい、光背を負っています。注目すべきは、胸の左右及び両膝に描かれた四角い書き判です。これは、segmentumと呼ばれるマニ教僧侶の服装に見られる特徴の一つです。

同様の図像を確認できるのが、以下に挙げる五点の絵画です。「宇宙図」(図1)から確認します。本図にはマニ教の宇宙観が表されています。多様なモチーフがびっしりと描き込まれており、その情報量の多さに圧倒されます。ひときわ目立つのが、画面上部の十層の円弧です。それぞれ十二の門があり、両端の四人の人物によって支えられています。層の間にはマニと思われる白衣を着た人物が繰り返し登場しています。漢訳マニ教経典に「十天八地」とあるように、宇宙を構成する基本要素が表されます。画面下段も層に分かれていることが確認されます。その間には六匹の大蛇による籠、須弥山に似た一本の大樹が描かれます。

続いて「聖者伝図(1)」(図2)です。本図には、赤い縁取りの白衣を羽織ったマニ教僧侶が繰り返

し登場します。中心となる人物には頭光が描かれており、彼に引率された複数のマニ教僧侶と共に異時同図で表現されます。画面上部から下部へと場面は展開し、大海原での航海、上陸、マニ教寺院の建立及び信者の帰依の様子が描かれます。

「聖者伝図(2)」(図3)は、マニ教における掛幅説話画の一片といえる画面構成で、主に三つの場面に分けることが出来ます。一点目は、画面向かって左手に描かれる、光背を負い蓮華座に坐すマニ僧と、彼を礼拝する仏教僧侶の集団です。五名の仏教僧が描かれており、このうち二人が合掌、三名は楽器を手にします。戸外では六名の俗人がおり、三名が楽器を手にし、残りの二名は幡、一名は傘を差して控える様子が描かれます。二点目は画面向かって右手の場面です。二名の従者を従えた役人に、五名の人物が頭を下げて何かを頼み込んでいます。そして三点目が画面下部に描かれる、頭光を負ったマニ僧に、道服をまとった人物が合掌する場面です。

「天界図」(図4・5)には、建物の中に坐す神格を、二名の従者を従えたマニ僧が訪ねる場面が繰り返し描かれます。何れも雲に乗っており、中空に浮かびます。二つの断簡は表現が共通し、図様の連続性を伺わせ、本来は同じ画面であった可能性が高いと思われる。

以上の絵画とは性格が異なりますが、図像の類似性が認められるのが、「虚空蔵菩薩像」(栖雲寺蔵、図6、以下、栖雲寺本)です。左手に十字架を持った独尊像が描かれます。理想化されていない顔貌表現や独特の持物から、この地で亡くなったキリストン大名、有馬晴信の肖像画との伝承があります。文華館本をはじめとする一連の「マニ教絵画」が見出される発端となった作例です。金の縁取りのある白衣を着、両脇と

両膝にsegmentumが描かれていることが注目されます。その尊名をめぐるには、景教(ネストリウス派キリスト教)の礼拝画像、すなわちキリスト「弥施訶」、天使「阿羅漢」あるいは聖人「大徳」を表しているとする説と、マニ教におけるキリスト像であるとの説が出されています。

最後に、一連のマニ教絵画の表現と制作について考えてみます。「宇宙図」「聖者伝図」「天界図」は、人物や建築をはじめとしたモチーフの表現上の類似、装飾性の強い金泥の使用法などから、近しい制作環境にあったと思われる。ただ、文華館本と比較すると、やや古拙な描写が目立ち、形式化している部分も見受けられます。ところで、文華館本は「皇慶元年(1312)二月」の銘を有する「王宮曼荼羅圖」(大恩寺蔵)と画風や図像上の類似性が認められます。その他のマニ教絵画も同時期に描かれた所謂「寧波仏画」との作風の近似が認められます。一連のマニ教絵画は14世紀半ば頃を下限とする、何れも元時代に描かれたものと考えられます。

ここで、「宇宙図」に描かれた頭部のみの尊格に注目します(図7)。他のモチーフに比して描写力が格段に高いのです。同一画面での表現の巧拙は、工房制作によるものと考えられますが、この表現は文華館本や栖雲寺本の顔貌描写に繋がると思われます。栖雲寺本も、文華館本や大恩寺本と近い時期の制作との先学による指摘があります。「宇宙図」は「聖者伝図」「天界図」よりも先行するものとみられます。

仏画と共通する図像や技法で描かれたこれらのマニ教絵画は、その希少性だけでなく、画工と注文主との関係、画工同士のネットワークなど、当時の絵画制作の実態を考察する上でも鍵となる重要な作例なのです。(古川攝一)

